

鸚鵡小町

ワキ	シテ	地は	季は
勅使	小野小町	近江	三月

ワキ詞

「是は陽成院に仕へ奉る新大納言行家にて候。さて
も我君敷島の道に御心を懸けられ。普く歌を撰ぜ
られ候へども。叡慮に叶ふ歌なし。こゝに出羽の
国小野の良実が娘に小野の小町。彼はならびなき
歌の上手にて候ふが。今は百年の姥となつて。関
寺辺に在る由聞し召し及ばれ。帝より御憐みの御
歌を下され候。其返歌により。重ねて題を下すべ
きとの宣旨に任せ。唯今関寺辺小野の小町が方へ
と急ぎ候。

シテ一声

「身は一人。我は誰をか松坂や。四の宮河原四つの辻。
いつ又六つの街ならん。

サシ

「昔は芙蓉の花たりし身なれども。今は藜藿の草と
なる。顔ばせは憔悴と衰へ。膚は凍梨の梨の如し。
杖つくならでは力もなし。人を恨み身をかこち。
泣いつ笑うつ安からねば。物狂ひと人は言ふ。

歌

「さりとては。捨てぬ命の身に添ひて。く。面影

につくも髪。斯からざりせばかゝらじと。昔を恋
ふる忍寐の。夢は寐覚の長き夜を。飽きはてたり
な我心。く。

ワキ詞 「如何に是なるは小町にてあるか。

シテ詞 「見奉れば雲の上人にてましますか。小町と承り候
ふかや何事にて候ふぞ。

ワキ 「さて此程は何くを住家と定めけるぞ。

シテ 「誰留むるとはなけれども。唯関寺辺に日数を送り
候。

ワキ 「実にく関寺は。さすがに都遠からで。閑居には
面白き所なり。

シテ 「前には牛馬の通路有つて。貴きも行き賤しきも過
ぐ。

ワキ 「後には靈験の山高うして。

シテ 「しかも道もなく。

ワキ 「春は。

シテ「春霞。

地「立ち出で見れば深山辺の。く。梢にかゝる白雲は。花かと見えて面白や。松風も匂ひ枕に花散りて。それとばかりに白雲の。色香おもしろき気色かな。北に出づれば湖の。志賀辛崎の一つ松は。身の類ひなる物を。東に向へば有難や。石山の観世音。瀬田の長橋は狂人の。つれなき命の。かゝるためしなるべし。

シテ詞「かくて都の恋しき時は。柴の菴に暫し留むべき友もなければ。便梨の杖にすがり。都路に出でゝものを乞ふ。乞ひ得ぬ時は涙の関寺に帰り候。

ワキ詞「如何に小町。さて今も歌をよみ候ふべきか。

シテ「我いにしへ百家仙洞の交はりたりし時こそ。事によそへて歌をもよみしが。今は花薄穂に出で初めて。霜のかゝれる有様にて。浮世にながらふるばかりにて候。

ワキ「実に尤道理なり。帝より御憐みの御歌を下されて候ふ是々見候へ。」

シテ「何と帝より御憐みの御歌を下されたと候ふや。」

あら有難や候。老眼と申し文字もさだかに見え分
かず候。それにて遊ばされ候へ。

ワキ「さらば聞き候へ。」

シテ「如何にも高らかに遊ばされ候へ。」

ワキ「雲の上は。」

シテ「雲の上は。」

ワキ「雲の上は。有りし昔にかはらねど。見し玉だれの
内やゆかしき。」

シテ詞「あら面白の御歌や候。悲しやな古き流れを汲んで。」

水上を正すとすれど。歌よむべしとも思はれず。
又申さぬ時は恐れなり。所詮此返歌を唯一字にて
申さう。

ワキ詞「不思議の事を申す者かな。それ歌は三十一字を連

ねてだに。心の足らぬ歌もあるに。一字の返歌と申す事。是も狂氣の故やらん。

シテ「いやぞと云ふ文字こそ返歌なれ。

ワキ「ぞと云ふ文字とはさて如何に。

シテ「さらば帝の御歌を。詠吟せさせ給ふべし。

ワキ「不審ながらも指し上げて。雲の上は有りし昔にかはらねど。見し玉だれの内やゆかしき。

シテ詞「さればこそ内やゆかしきを引きのけて。内ぞゆか

しきとよむ時は。小町がよみたる返歌なり。

ワキ「さて古もかゝるためしの有るやらん。

シテ「なふ鸚鵡返しと云ふ事は。

地「此歌の様を申すなり。帝の御歌を。ばひ参らせてよむ時は。天の恐れも如何ならん。和歌の道ならば。神もゆるしおはしませ。貴からずして高位に交はると云ふ事。たゞ和歌の徳とかや。く。

地クリ「それ歌の様を尋ぬるに。長歌短歌旋頭歌。折句誹

諧混本歌。鸚鵡返し廻文歌なり。

シテサシ

「中んづく鸚鵡返しと云ふ事。唐に一つの鳥あり。

地

「其の名を鸚鵡と云へり。人の云ふ言葉を受けて。

即ちおのが囀りとす。何ぞといへば何ぞと答ふ。

鸚鵡の鳥の如くに。歌の返歌もかくの如くなれば。

鸚鵡返しとは申すなり。

クセ

「実にや歌の様。語るに附けいにしへの。猶思はるゝ

はかなさよ。されば来し方の。代々の集めの歌人

の。其多くある中に。今の小町は。妙なる花の色

好み。歌の様さへ女にて。唯弱々とよむところぞ。

家々の書伝にも。しるし置き給へり。

シテ

「和歌の六義を尋ねしにも。

地

「小町が歌をこそ。たゞこと歌のためしに。引くの

みか我ながら。美人の形も世に勝れ。余情の花と

作られ。桃花雨を帯び。柳髪風にたをやかなり。

紫筍なほ動きほこり。梨花は名のみなりしかど。

今憔悴と落ちぶれて。身体疲瘁する。小町ぞあはれなりける。

ワキ詞 「如何に小町。業平玉津島にて法楽の舞をまなび候へ。

シテ詞 「さても業平玉津島に参り給ふと聞えしかば。我も同じく参らんと。都をばまだ夜をこめて稻荷山。葛葉の里も浦近く。和歌吹上にさしかかり。

地 「玉津島に参りつゝ。く。業平の舞の袖。思ひめ

ぐらす信夫摺。木賊色の狩衣に。大紋の袴の稜を取り。風折烏帽子召されつゝ。

シテ 「和光の光り玉津島。

地 「廻らす袖や波がへり。(序の舞)

シテ 「和歌の浦に。汐満ち来ればかたを浪の。

地 「蘆辺をさして田鶴鳴き渡る鳴き渡る。

シテ 「立つ名もよしなや忍音の。

地 「立つ名もよしなや忍音の。月には愛でじ。

シテ「是ぞ此。

地「積れば人の。

シテ「老となる物を。

地「かほどに早き光りの陰の。時人を。待たぬ習ひとは白波の。

シテ「あら恋しの昔やな。

地「かくて此日も暮れ行くまゝに。さらばと云ひて。行家都に帰りければ。

シテ「小町も今は是までなりと。

地「杖にすがりてよろくと。立ち別れ行く袖の涙。立ち別れ行く。袖の涙も関寺の。柴の菴に帰りけり。